

10

process in
architecture exhibition

—— これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35の存在を考察する。



14年前、U-30として開催を始めた本展は、若い世代の出展者が、世界の第一線で活躍する巨匠建築家や出展者の一世代上の建築家と議論を交わし、あらたな建築の価値を批評し共有しようと召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国で活動をされ、影響力を持ちはじめていた建築家・史家である。北海道の五十嵐淳、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志、九州地方の塩塚隆生。中部と四国を除いた、日本の6地域から集まった。そして開催初年度に登壇した、三分一、塩塚など1960年代生まれの建築家から、開催を重ねるごとに1970年代生まれの建築家・史家が中心となる。2013年には、8人の建築家（五十嵐淳、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、芦澤竜一、吉村靖孝、2021年より、永山祐子）と2人の建築史家（五十嵐太郎、倉方俊輔）による現在のメンバーにより開催を重ねている。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約10年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者である新時代を考察するような仕組みとなるよう当初に試みたのだが、この10名が集まった4年目の開催時に、藤本が「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」と発言し、このメンバーで継続するようになった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家と出会うのは開催前年度の2009年。長きにわたり大学で教鞭を執る建築家たちから候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりであった全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に向き、27組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等を代表する出展者7組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残しながら、自薦による公募を開始しつつ、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、オーガナイザーを務める平沼が担当し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考による二段階審査方式とした。また海外からの応募で2011年の出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また、他薦によるものは、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり1年目は完全指名、2年目の2011年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施したのは、開催5年目の2014年。初代・審査委員長の上石が、自らの年齢に近づけ対等な議論が交わされるようにと、展覧会の主題であった

U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 9 年が経つ。また、この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考と出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の開催である 2015 年。つまり公募開催第 2 回目の審査委員長を務めた藤本が、はじめてのゴールドメダル授与設定に対し「受賞該当者なし」と評した。しかしこれが大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出することによる「伊東賞」が隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞に翌年も出展者となるシード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの出展年齢変更を含め、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けていくのが、本展のあり方のようだ。2019 年には 10 年目の開催を迎え基盤をつくり準備を整えた本展が、あらたな 10 年の始まりとなる 2020 年に、コロナ禍の大きな試練が待ち構えた。21 年、22 年の開催危機を乗り越え、本展は今回、2023 年の開催で 14 度目を迎えた。

昨年より、永山祐子を加えたこの出展者の一世代上の建築家・史家 10 名が、一同に揃ったシンポジウム後に場を設け、来年、開催 15 年目を迎える今後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、2017 年より開催をはじめ、本年、第 7 回目の「10 会議」を開催した。



—— 皆様お疲れ様でございました。例年通り、ゴールドメダル授与後、「祝杯のビール」をしばらく我慢していただきまして、これから 60 分間。この開催が継続するエンジンのような恒例の「10 会議」を始めさせていただきます。この会議は、出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたメンバー 10 名が一同に揃っているシンポジウムの開催直後に場を設け、次の 10 年後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、毎年開催しております。本年の審査委員長を務められた平沼先生、そして来年の審査委員長を務めていただくことになった永山先生を中心に、来年に向けての第 7 回目の「10 会議」を開催いたします。開催当初より本展のファウンダーとしてオーガナイザーを務めてくださる平沼先生、本日も進行と補足応答をどうぞよろしく願いいたします。

（一同）どうぞよろしく願いいたします！

—— 最初にひとつ皆様にご報告がございます。2011 年より本展に毎年お越しくださり、数えきれないご尽力をくださいました谷尻先生が、本年をもってご卒業されることとなりました！谷尻先生、来年の図録に掲載させていただきますので、皆様へのご挨拶と、後進で建築を目指す若者へのメッセージを残していただきませぬでしょうか。

一同：（拍手）

谷尻：僕も何かしらこの場に呼んでもらえる価値を生んでいたことで、この場にいる皆さんとずっと居られたのだと思います。まずはここにいる同世代の皆さんに、これまで十数年間のこの場を共有させていただいた御礼を申し上げます。U-35 たちは本来やるべきことに真っすぐ、実直に向き合います。そんな彼らを遅くも羨ましくも思い、また同時に自分自身を見つめ直す機会となりました。でも、年齢を重ねる度に、本来やるべきこと以外の取り組みもやはり増えてしまう。スタッフも増え、身近な後進を見ていく立場となり、彼らを U-35 と同様に改めて見直す上でも、一旦、様々なことを整理し、再度、最初に自分が目指したことへの原点回帰を考えるようになりました。そんな意味で、一度、卒業させていただくことにしました。本展に応募してくる方たちはまさに、ひとつのことに真っすぐ思い切り向き合う時期でもあり、その時間こそが未来をつくると思います。その大切な姿勢を変えずにやってもらいたいと、今後、出展してくる方々へメッセージとして残します。U-35 は不滅ですね！（笑） どうもありがとうございました。

——— ありがとうございます！ここにいる先生方が打ち上げの2次会3次会と進むにつれ、深夜に疲れ果ててお帰りになられる中、谷尻先生が若手を引き連れて朝まで寄り添い、議論を交わしてくださいましたことは、私たち運営学生にも語り継がれています。これから、本展に興味を傾けていただき、いつまでも若者の私たちに希望や期待をかけてください。昨日、開幕したばかりで本展は11日間続き、まだまだ本展の開催に最後までご尽力くださいますが、この素晴らしいメンバーで交わす最終の夜となります。最後に皆様、大きな拍手をお願い致します！

一同：わぁ、おつかれさまでした！（大拍手）

——— それでは、出展者の選出から大変悩まれ、先ほど GOLD MEDAL 賞を授与された平沼先生より、今年の出展者を振り返り、選考に至る思考の経過と印象をお聞かせください。

平沼：昨年の開催から公募を締め切った今年の1月。十年余り、毎年若手を見てきたことから、見方が固定していないか、何かを見落としていないかという不安に駆られ、出展者の選考にあたっては随分迷いました。それは比較で選出するようなことや、誰かのモノマネで応募をした時代ではなく、圧倒的でオリジナルな取り組みが提示されていたからですが、公募締め切りの翌日に1日かけて選出したものの、結局翌週に、選考に誤りがないかダブルチェックを藤本さんにしていただき、本展の7組を選出しました。

藤本：平沼さんが悩んでいる姿を見るのが楽しかったです！（笑）

一同：（大笑）

平沼：4月の初顔合わせ、出展者説明会でも永山さんと一緒に展示エスキースにお付き合いいただき、一昨年吉村、昨年芦澤、両審査委員長からの引継ぎが上手くいき、「今年の審査委員長がよかったんじゃないか！（笑）」と言いたところですが、前評判でも話題が沸騰した展覧会として繋がったのだと思います。

一同：（大笑）

平沼：（笑）展示が変化したのは、それ以降もやり取りが続いた永山さんとのダブル・エスキース。

それが影響したのかもしれませんが。出展者らが自主的に集まり、グループ展としての本展の意義を話し合われ、You Tube での自発的な公開のエスキース会をされるようになっていきました。

永山：4月の出展者説明会の際、エスキースや座談会の場で、参加者交換日記でもやれば？なんて、言っていたのですよね（笑）。

五十嵐淳：出展者へのエスキースというのは、設計提案や作品ではなく、展示構成についてエスキースしたということですか。

倉方：展示に対してですね。公開エスキース、やっていましたね。

永山：交換日記ではないですがお互いにエスキースをするなど交流を深めていたのですね。でもそれって、凄く大事ですよ。こうやって集まることがまず素晴らしいし尊いから、同じ目標で集まっている、まさに真剣に話せる相手が見つかるというのはとても大切に感じました。

平沼：とても良かった気がします。本展は、ここにいる皆で、コンマ1ミリずつでも良くしている展覧会。何でもそうかもしれませんが、いきなり良くなるわけではないと思うのです。昨年の芦澤さんのディレクションでも、この場で凄くなったって言っていましたね。



永山：昨年も凄かったですよね。

平沼：そう、そして今年もそう言ってもらえたので、回を重ねるごとに少しずつでも良くしていることを、出展される方たちに継いでもらえればうれしいのです。

——— 来年に向けて、この昨年のプログラム修正の効果を振り返り、改善すべき点があればお聞かせください。

藤本：今日の書籍サイン会の時間が長くなかったですか。

平沼：それは藤本さんが安藤さんの真似をして（笑）、不慣れにも親切心からお一人ずつお名前を聞いてあげたからです。藤本さんの前に長蛇の列…（笑）

一同：ワハハ（笑）。

藤本：それで皆さん並んでいただいていたんですね（笑）。でも何冊くらい売れたのですか。

——— 昨年は10分で約80冊、今年は20分程で約150冊、先生方のサインがお手元に届きました。

一同：おお！

永山：それは凄いですね。目の前でサインがもらえるわけですからね。それは若手建築家への応援を込めて、やってあげましょう。

谷尻：うんうん、直接コミュニケーションがとれますからね、大切だと思います。それに結構遠くから来られている方も多かったですね。

平沼：藤本さんのサインをお待ちしている間に「どこから来たの？」とお聞きすると、岩手、宮城、東京など、東の方面から、この日に合わせて、わざわざ来てくださった方が多かったように思います。若い方たちが多いので、将来、今日の記憶を辿る未来の自分へのお土産として、また家族や友達へ話題を持ち帰るアイテムの一つとして伝えてもらえる良い機会のように思いました。

五十嵐太郎：そうですね。それに今年は全ての展示が凄く充実していて、素晴らしい内容でした。またシンポジウム最後の議論の盛り上がりを見ると、もう少し時間がほしかったです。本展が盛り上がることはもちろん良いことですが、これから U-35 に挑戦する方たちは、展示ハードルがさらに上がっているの、今後は相当な努力が必要だろうなあ。

一同：うんうん。（これからの出展者に期待を寄せて）がんばってください。

——— 来年、2024年の審査委員長を務めていただく永山先生。昨年からお越しいただいているこの U-35 若手建築家 7 組による建築の展覧会とシンポジウムを「新鮮な目」で見て、どのような感想をお持ちでしょうか。

永山：昨年初めて参加をして、とても力強い展示だなと思いましたが、今年はさらにアベレージが上がっていた。それぞれの出展者たちが素材を工夫していたし、展示手法にそれぞれの個性がちゃんと出ている U-35 は本当に面白い建築展だと思います。小さな展示スペースの表現がエスキース後も結構変化して、もう少しこういうところを見せた方がいいのではないかと伝えていたところがブラッシュアップされていましたし、グループ展として互いに話し合っていたことも関係性を深めていたことも含めてとてもいい場になっているなと思いました。とにかく出展者たちは、こういう場でのチャンスを活かして、次につながられるきっかけになったと思います。ひとつの作品においてどんなに際限なくやってもエネルギーは限られていますから、エネルギーを無駄遣いせず、



こういう場を効率的に活かした方がいいと思っています。今回、挑まれ出展されたことが自分たちの次の作品にも繋がっていたら、凄く良いですね。

五十嵐淳：本当に凄くなってきたね。今回の公募枠からは何組、選出されたのですか。

平沼：公募枠は3組。大野さん、福留さん、小田切さん+瀬尾さん+渡辺さんを選出しました。シードの佐々木さん、サーシャ+佐藤さんの2組を除くと、5組という小さな枠の中で悩みに悩み、結果として指名他薦から2組、自薦公募から3組という選出結果となりました。

永山：自薦公募からでも、結構凄い方たちがいますよね。

——— それではここで、来年の他薦推薦枠にご推薦いただいた方々のご紹介をお願いいたします。2017年に、第1回目の「10会議」が発足され、本展のあり方を議論させていただく中で、出



展者の選出方法として他薦である推薦枠を追加し、1他薦・推薦枠、2自薦・公募枠、3シード・指名枠との3枠といたしました。また2019年の開催中、GOLD MEDALを獲られた秋吉さんから、出展者世代の方が若手の同世代の存在を多く知っているとのお助言をいただいたことから、今年も出展者の皆様から、それぞれ2-3名のお薦めリストをいただき、こちらを参考に、皆さんから推薦される方を選出いただきました。来年の10名による選出者の簡単な紹介を五十嵐太郎先生よりお願いいたします。(1988年4月生まれ以降の方が応募可能・2024.3月末日時点で35歳以下)

【2024年推薦】審査委員長：永山祐子

- 01. 五十嵐太郎 ●井上岳 | GROUP
- 02. 倉方俊輔 ●山田貴仁+犬童伸浩 | Studio Anettai
- 03. 芦澤竜一 ●西尾耀輔+片野晃輔 | veig
- 04. 五十嵐淳 ●石黒泰司 | ambientdesigns
- 05. 谷尻誠 ○不選出
- 06. 永山祐子 ○2024年審査委員長のため不選出
- 07. 平田晃久 ●石村大輔+根市拓 | 石村根市
- 08. 平沼孝啓 ●守谷僚泰+池田美月 | OBJECTAL ARCHITECTS
- 09. 藤本壮介 ●加藤麻帆+物井由香 | 加藤物井
- 10. 吉村靖孝 ●山川陸 | 山川陸設計

【2023年推薦】審査委員長：平沼孝啓

- 福留愛 | iii architects
- 大村高広 | GROUP
- 大野宏 | Studio on site
- 竹内吉彦 | t デ
- 不選出
- 久米貴大 | Bangkok Tokyo Architecture
- 笹田侑志 | ULTRA STUDIO
- 2023年審査委員長のため不選出
- 小林広美 | Studio mikke
- 小田切駿+瀬尾憲司+渡辺瑞帆 | ガラージュ

【2022年推薦】審査委員長：芦澤竜一

- 01. 五十嵐太郎 ●佐々木慧 | axonometric
- 02. 倉方俊輔 ●石黒泰司 | ambientdesigns
- 03. 芦澤竜一 ○2022年審査委員長のため不選出
- 04. 五十嵐淳 ●森恵吾+張婕 | ATELIER MOZH
- 05. 石上純也 ○不選出
- 06. 谷尻誠 ○不選出
- 07. 平田晃久 ●西倉美祝 | MACAP
- 08. 平沼孝啓 ●Aleksandra Kovaleva+佐藤敬 | KASA
- 09. 藤本壮介 ●杉山由香 | タテモノトカ
- 10. 吉村靖孝 ●甲斐貴大 | studio archè

【2021年推薦】審査委員長：吉村靖孝

- 原田雄次 | 原田雄次建築工藝
- 太田翔+武井良祐 | OSTR
- 山口晶 | TEAM クラプトン
- 森恵吾+張婕 | ATELIER MOZH
- 岸秀和 | 岸秀和建築設計事務所
- 鈴木岳彦 | 鈴木岳彦建築設計事務所
- 松下晃士 | OFFICE COASTLINE
- 榮家志保 | EIKA studio
- 板坂留五 | RUI Architects
- 2021年審査委員長のため不選出

上記の他薦・推薦枠より2-4組、自薦・公募枠により2-4組、

●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長・選出数による。

五十嵐太郎：GROUP の井上さんです。正直、彼らが手がけた新築の作品はちゃんと見たことがないのでですけど、アートに関連するプロジェクトが多くて、最初に名前を知ったのは、磯崎新さんによる新宿のホワイトハウスをリノベーションをした時ですね。この間、金沢 21 世紀美術館 DXP 展で、秋吉くんも出していたのだけれど、GROUP も参加していて、AR 技術を用いて、館内に雨を降らせるという映像作品をつくっていました。BANK ART など、美術展の仕器でも、名前を見ることがあります。展示のプロみたいな建築家でもあるので、この展覧会を多角的に強化していただきたいと思って推薦しました。

芦澤：veig の西尾さんと片野さんです。庭師と生態学者のペアで、アプローチが結構面白そうだなと思いました。彼らが、そのまま庭をやっていたら面白くないのだけれど、建築を提案してくれるのだったらという期待を持ち推薦しました。

五十嵐淳：ambientdesigns の石黒さんです。割と真っ当に建築をつくっている印象を持ち、この人を選びました。



倉方：僕は Studio Anettai の 2 人組です。ベトナムホーチミンをベースにしていることに興味を持ちました。3D パースをつくり、受ける仕事っていうのと、設計を並行してやっていて、ヴィラは設計者自らが施主としてやっていることとの関連性について期待値が大きいと思って選びました。

平沼：OBJECTAL ARCHITECTS の守谷さんはハーバード GSD 出身、池田さんは、SCI-Arc 出身です。グローバルな視野を持っている方たちだと思って選びました。

藤本：僕は加藤物井の加藤さんと物井さんですね。とても楽しみです。

吉村：山川陸さんです。藤村龍至さんのところで助手をやっている時に知っていたのだけれど、リストに上がっていて思わず推薦しました。建築じゃないプロジェクトをたくさんやっていて期待を寄せています。

平田：僕は石村さんと根市さんです。新鮮に感じる雰囲気を持っている建築ですね。そのなんなのかわからない方たちの話を聞いてみたいという思いがあって選びました。

——— ありがとうございます。この他薦・推薦枠より 3-4 組、自薦・公募枠により 3-4 組、前年の GOLDMEDAL 受賞者のシード枠の 1 組、計 7 組を、来年の審査委員長、永山先生に選出いただけます。選考時のお相手として平沼先生には、締切日の翌日、永山先生の事務所に向かっていただき、選出時の状況収録と選出のお相手をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。そして若手を応援するため、これからの若い世代に「建築への興味」を示そうと、各先生方による展覧会会場でのイブニングレクチャーを導入いただきました。この目的は、大阪駅前という地方都市を代表する駅前での開催を継続するため、動員数を増やすことではじめましたが、昨年まではリアル入場に制限がありましたものの、建築に興味をもつ地元高校生たちに向けても、継続して実施しています。たくさんの方にお越しいただき大きな効果を生み出すことを願い次年度もどうか周知・告知をいただけますよう、よろしくお願いいたします。

一同：かしこまりました！

——— それでは公募につきましては、引き続き今年の応募条件をこのまま、独立した U-35

(35歳以下)の設計者を多く募ります。また以前議論の中で、次年度36歳となる方が賞を取られることがあれば「そのまま出展してよい」と決まりましたので、今回 GOLD MEDAL 賞の佐藤さんが36歳になりますが、シード権を受けられる場合はそのまま出展いただくことにいたします。最後になりましたが、今後応募をくださる若手へ向けて、ファウンダーの皆様からメッセージをいただけないでしょうか。

藤本：U-35は同世代の同士が知り合って、同じ展覧会に設置する、作品同士の影響まで語る場になってきていて、そこにも魅力がありますね。

平沼：本当にそうですね。今年から課外活動のようなお互いのエスキースを経て、あれだけの展覧会が完成しました。普段できない思考の振り返りもできる場だと思いますし、まだ僕たちが知らない若手が挑戦され、その存在を知らせてほしいと思います。

—— 皆さま本日は、終日にわたり、誠にありがとうございました。本日は、展覧会会場にての視察にはじまり、4時間余りのシンポジウムの後、本日の会議の場にご参加いただき、貴重なご意見をいただけて深く感謝しています。最後となりましたが、来年のシンポジウムⅠは、2024年10月19日(土)、翌26日シンポジウムⅡ(伊東賞選出)と決定しておりますので、皆さま、15年目の開催もどうかよろしくお願いいたします。また本年の開催について、良いことも、良くないことも含めて話題にいただき、この後の会期中に是非SNSなどを通じて、応援をいただきたいと思っております。それではビールをお待たせしました！出展者様がお待ちですのでこの後、労いのかねて建築談義に花を咲かせてください。皆様、大きな拍手で閉会とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました！

一同：(大拍手)



U-35 2023シンポジウム会場の様子

2023年10月21日

大阪・梅田 グランフロント大阪 北館4階 ナレッジシアター・控室